なぜマイノリティは音楽に関わるのか  －共同研究 －マイノリティと音楽の複合的関係に関する人類学的研究（ みんばくリポジトリ）

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>寺田 吉孝</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>民博通信</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>22-23</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>129</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2008-2011</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10502/4889">http://hdl.handle.net/10502/4889</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
なぜマイノリティは音楽に関わるのか

共同研究 ● マイノリティと音楽の複合的関係に関する人類学的研究 (2008-2011)

文・写真
寺田吉孝

マイノリティの文化や歴史は、彼らが居住する国家や地域の公的な文化表象や教育から排除されている場合が多い。マイノリティの人々は、文化的同化への圧力のなかで、自らの出自や文化を意図的に忘れようとすることもあれば、また逆に同化に抵抗することもある。いずれの場合も、排除の圧力や主流文化の存在に圧倒されて自信をなくしたが、自己の立ち位置を見失うなど、さまざまな精神的苦痛を味わうことになる。

このような状況に置かれるマイノリティの人びとが、音楽に表現や主張の場を求める事例が、これまでにも数多く報告されている。彼らにとって他のメディアへのアクセスが制限されていることも理由の一つであろうが、この現象をそれだけで説明することはできない。マイノリティの人びとの音楽への関与は、かれらの自己イメージとどのような関係を持つのか。音楽のいかなる要素がかれらの音楽との関わりを可能にしているのか。マイノリティの音楽実践は、かれらの政治活動や社会運動とどのような関係を持つのか。本共同研究は、このようなマイノリティと音楽実践の関係について議論を深めることを目的として組織された。

先行研究の傾向

マイノリティの音楽に関する研究は、民族音楽学、人類学、社会学、パフォーマンス研究、文化研究など複数の分野で進められてきたが、学際的な共同研究は少なくとも日本では行われてこなかった。民族音楽学においては、少数民族の音楽が、その最初期から重要な研究対象であったが、主流文化において消減もしくは弱体化した音楽の歴史的な残滓として位置づけられることが多かった。このような研究は、マジョリティ側が所属する研究者が、比較的短期間の調査に基づいて、音楽の楽理的構造、演奏形態、社会的機能など、古典的な調査項目について分析するものであった。その背景には、少数民族の音楽を、音楽の世界的な分野で扱い、音楽の比較的方法論として位置づけられるノスタルジックな進化論的視点が存在していたと言える。

上に述べたようなマジョリティ研究者の研究では、調査する者とされる者の力関係は、おもに調査者の個体的な倫理的問題として扱われ、構成的力の均衡は主観的であるが、1970年代以降、マジョリティ研究者のもつ支配的な視線や構成的力が問題視されている。研究対象となった集団から研究者者が現れるようになった。北米の民族音楽では、1980年代以降、アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系などの研究者が、自らのマイノリティ体験を起点とした研究を活発化させているが、それと同時にマジョリティ研究者も批判を否認してこの分野から撤退するという、マイノリティ音楽研究のカーティッシュ化をも説明している。

一方、社会科学、人類学、文化研究を中心としたマイノリティ・移民・ディアスポラ研究においても、マイノリティの音楽実践が非常に検討されてきたことはいうまでもない。音楽に関する言及は少なくはないが、音楽の内容との関連からアイデンティティの問題を考察する研究は極めて珍しい。「音楽Aは集団Bの文化的アイデンティティの表出である」というような絶対的記述はさすがに少なくなったが、作り出される音響の詳細な検討や、音が生成する場としての身体の問題（後述）などに踏み込んだ議論はほとんど行われていないように思われる。音楽の専門的な知識や経験がなければ研究が行えないわけではなくが、音楽が特定の構成要因や演奏上の慣習がマイノリティの主体との接点になる場合があり、それを分析する能力を養うことはマイノリティと音楽の研究において不可欠であろう。

複合的関係

本研究を進める上で、関連する二つの点に留意している。第一に、マイノリティは一元的に劣位におかれるのではなく、マイノリティ・マジョリティ関係を形成する複数の軸（民族、宗教、言語、階層、クラス、ジェンダー、セクシュアリティなど）が複合的、重層的に絡み合っている存在している点である。そうであるとするならば、この複合性・重層性は音楽の実践にどのように現れどのように現れるのでだろうか。

一例をあげると、北米に住む日系女性のタイコ（和太鼓）音楽への深い関与は、主流文化に根を深く存在する人種とジェンダーに関するステレオタイプへの抵抗であるだけ
だけでなく、日系社会で自明であるとされていた女性像に対する異議申し立てでもあった。しかし、それと同時に、タイコ演奏における構えや打ち方の基礎は男性が作ったものでもあり、「男らしさ」という意味づけが常にまとわりついている。そのため、北米の日系・アジア系女性たちは、タイコの持ち音響的・視覚的インパクトを保ちながらも、従来の「男らしさ」を喚起しない新しい演奏の様態を作りだそうとしている。タイコを打つという身体行為とそれに対する内外からの様々な意味づけの交渉の過程から、日系女性・アジア系女性としての自己イメージが創られ鮮明化してい。彼女たちは演奏するタイコ音楽の音響、振りや演奏形態上の具体的な変化は、このような人種やジェンダーの軸が複合的に変化する環境において行われると考えることができる。また、近年顕著になってきた日系以外のアジア系、ヨーロッパ系、およびセクシュアルマイノリティの太鼓奏者の増加は、タイコ音楽と演奏者の関係の考察に、新たな軸を加えることになり、その関係はより複合的、重層的になっている。この共同研究では、類似する事例を世界各地から集め、それらを詳細に比較・検討することから、音楽とアイデンティティの関係についての考察を精緻化したい。

マイノリティの身体と音楽
第二に、音楽は身体を通してのみ生成されるという視た当たり前だが、マイノリティ音楽の研究において十分に観察されていない側面に注目したい。マイノリティ音楽にとどまらず、音楽を生み出し、享受する身体はアイデンティティ形成のプロセスでどのように機能するのか。マイノリティの音楽実践の基盤に、力の不均衡に基づく社会関係や被抑圧の歴史が存在するのならば、身体はその記憶装置として機能するのか。マジョリティの音楽実践における身体と差異があるのか。

身体は社会的に構築され、「規制」と「抵抗」がしがのぎを削る場である。そして、そのような抵抗はしばしばパフォーマンスを通して表現されることが指摘されている。先にあげた日系女性の例に戻ると、タイコを打つ構えや振りは日系社会で期待される「開い身体」とは直接対位にある「開かれた身体」であるがゆえに抵抗の力を持つ。家庭内で「足を広げな」「大きな声を出すな」と言われ続けた日系女性たちが、足を大きく開くタイコの構えや、身体を震わせ突き動かすようなタイコの喚起に鬱積されるのは、日系社会の規制に対する抵抗がタイコのパフォーマンスを通じて実践できるからである。

あるフィリピン系アメリカ人は、フィリピンの伝統舞踊を学ぶ過程で、確かに自分の身体が北米の支配文化に同化されており、それでもそれにについてほとんど無自覚だったことに気付いたと述べる。このような身体の有り様には、体の重力の出し方（姿勢や歩き方など）のような日常の生活全般に関わるものから、太鼓のバチの握り方などのように音楽演奏に特化されたものまでが含まれる。このような自己の身体に主流社会が刻印されているという認識は、その身体を変革することなしには支配文化への抵抗は就成しないという考えを生み、それを実践する場として音楽が位置づけられる場合がある。そこで想定される、すでに失われてしまった「本来の」身体、集団に固有の身体は本質主義的であると批判することも可能であるが、このような実践が、マイノリティがマジョリティとの関係における自己の位置を確認し、その上で自らを変えていく意識の変革の契機になっている点に注目したい。

この共同研究には、専門分野（人類学、音楽学、民族音楽学、パフォーマンス研究、身体論、セクシュアリティ研究など）や研究対象の異なる研究者に参加を呼びかけた。また、マイノリティ音楽の研究には、そのマイノリティ性を出発点としている研究者の参加が不可欠であると私は考えているので、何人かのメンバーに参加を呼びかけた。多様なマイノリティ性をもつ研究者が対話だけでがでできる場を提供することを念頭において会の運営に努めていた。上述した留意点を共有しながらも、メンバーがそれぞれの視点・方法論を批判的に交差させながら議論を継続することによって、マイノリティの主体性を軸足を置いた新視点と方法論を模索していかなければならない。